刻

令和2年度

聖徳大学文芸研究同好会

ver.ONLINE

部長挨拶

こんにちは。文芸研究同好会です。部誌「刻」を手に取ってくださり、誠にありがとうございます。部を代表いたしまして、皆様にご挨拶を、そしてお礼を申し上げます。

さて、今回はいつもと違い、オンラインでの公開となりました。厳しい状況の中、私達の作品で少しでも楽しんでもらえたら、と思います。そこで、今回は「オンライン」というお題の元、部員たちそれぞれが作品を作り上げました。同じお題からでも違った世界が見えることを楽しんでいただきたいです。

最後に、この部誌名の由来について紹介させていただきます。「刻（とき）」という名前は、時間が進む様子を表しています。人もモノも作品も、変わらないものはありません。それぞれが進化していくものであり、立ち止まることはないのです。そんな思いから、秒針をイメージして名付けられました。進み続ける秒針のように作品が向上していけばという願いが込められています。

長くなりましたが、以上で挨拶とさせていただきます。私達が紡いだ世界を、どうぞ心ゆくまでお楽しみください。

令和二年　十一月　文芸研究同好会

目次

夢鈴
「オンライン」 3
幸田たつ
「ホリック」 4
天野蒼空
「新しい生活様式の提言」 5
初芽
「オンライン・サンタ」 11

オンライン

夢鈴

今日も画面と睨めっこをして一日が過ぎる。

画面と時々教科書を見比べては眉間に皺を寄せながら思考を巡らせる。

「これで良いのか？合っているのか？」そう疑いながら過ごす日々。

対面より確かに楽だ。こんな日々がずっと続けば良いとさえ思う。

だが、未来への不安は消えることなく募っていく。

自分の脳と感覚だけを頼りに今日も画面と共に過ごす。

ホリック

幸田たつ

皮肉なことではあるが
この世界は私が居なくとも正常に回っていく
まったく、皮肉なことではあるが
この世界は端切れだった物書きが死後に救われる
そして、皮肉なことではあるが
私の居場所は現世(うつしよ)ではない
まったく、皮肉なことではあるが
この液晶越しの掲示板だけが、私の

新しい生活様式の提言

天野蒼空

目が覚めたら、そこに知らない天井があった。布団の感触も自分の部屋にあるものよりもふかふかな気がする。カーテンの隙間から溢れてきた太陽の光が顔の上にかかって、なんだかムズムズする。

まだ夢の中なのだろうか、などと思いながら起き上がる。

眠っていたベッドはどうやらダブルサイズだったらしくて、床に足をつけるために少し移動しなくてはならなかった。ベッド脇にはサイドテーブルがあり、その上に卓上ランプと八時を指した時計が置かれていた。

カーテンを開けると、窓いっぱいの青が広がって、部屋の中がぱっと明るくなった。でも窓の外には他に何も見当たらない。一体ここはどこなのだろう。

ふと、着ている服に見覚えがない事に気がついた。いつも寝ているときに使っているパジャマではなく、見覚えのない、ゆったりとしたクリーム色のワンピース。いつ着替えたのだろう。

緊張感が頭の天辺からつま先まで走り、心臓の裏側から不安が顔を覗かせた。

――キーン

ハウリングが起きたときのような甲高い音が耳元でした。思わず耳をふさぐ。

「聞こえているようですね」

聞き覚えのない若い女性の声がした。どこから声がしたのか分かたなくてあたりを見回すが、前にも後ろにも横にも上にも誰もいない。

「こちらは見えないかもしれませんが、こちらからは見えているのでご安心ください、安住凛花さん」

機械的な、抑揚のない声に自分の名前を呼ばれて、どきりとする。

「私のこと、知っているんですか」
「被験者のサーチは十分に行われています」
「被験者……？」
なにかの実験に応募した覚えはないのだけれど、一体どういうことなのだろうか。
「厳正な抽選の結果、安住凛花さんは被験者に選ばれました。私達の××××××で開発された技術を地球の住人であるあなた達に提供することが決定しました。より沢山の地球の住民にこの技術を使ってもらうために、まずは地球の住民であるあなた達のデータを採取します」
「はあ、そうですか」
あまり理解ができないまま、私は気の抜けたような返事をした。
「詳しい説明を行いますので、リビングへどうぞ」
ドアの前によくゲームで次の行き先を示すときに出てくるような、赤い矢印が出てきた。どこから投影されているのかわからない。手で触れてもその矢印が手の形に沿って歪んだりするわけではなく、透明の矢印がそこに存在しているようだ。
これが違う星の技術なのだろうか、と思いながら私は矢印が示すドアを開けた。

リビングにはテレビやソファー、テーブルなどのリビングにあるような家具が置かれていた。きれいに整えられているけれど生活感のないその空間は、まるでモデルルームのようだ。
――ガチャリ
私が入ってきたドアと同じドアから誰かが入ってきた。
「凛花、なんでいるの？」

「拓海……、拓海も一緒なのね！」

目の前に現れたのは私の彼氏である拓海だ。一人きりではなかったという安心感と、大好きな人に会えたという喜びから思わず抱きつこうとした。

しかし、私の体は拓海の体をすり抜けてしまったので、拓海に触れることは出来なかった。

「なんで？」

転んで床に手をついている私を引き上げようと、拓海が私に手を伸ばす。でも、その手を取ることも出来なかった。そこに拓海はいるのに、手は空気しかつかめず誰もいないかのようだ。

「俺、幽霊にでもなったのかな」

暗い口調で拓海はそういった。拓海のことを抱きしめたかったけれど、抱きしめることの出来ない私はただそこに棒立ちになっていた。

「××××××の実験への参加、ありがとうございます。これより、概要について説明します」

天井から声が降ってきて、何も触っていないのにテレビがついた。

「とにかく、座るか」

拓海の言葉に頷き、テレビの前に置かれているソファーに座る。

「まず、実験スペースについての説明です」

画面上に1LDKの部屋の見取り図が二枚表示される。

「画面右側が安住凛花さんの部屋です。画面左側が斎藤拓海さんの部屋です。お二人は現在同じ間取りの別々の部屋でこの画面を見ています」

「ええ、じゃあ、ここにいるのは？」

隣にいるのは確かに拓海だ。そっくりな別の人なんてことはないだろうし。

「××××××を行うことで、実際に離れた場所にいる人同士が一緒に暮らすことできるのです。オンライン同棲という言葉があるようですが、現在地球上の一部の地域で使われている言語の示すこの言葉は、音声データを離れた場所にいる人に届けることによって同棲をしているような感覚を味わうことが出来るという意味があります」

肝心な部分はなんて言っているのか聞き取ることが出来ない。きっとこの実験の主催者たちの星の言葉なのだろう。

「しかし、私達の××××××では音声データだけでなく、立体の映像データを部屋のどの場所から発生しているものなのかというデータを付けて送ることが出来ます。更に、機械のオン、オフや物の移動も可能なので、相手側だけの画面がついたり、自分側だけものが移動したりすることがなくなり、認識のズレを抑えるサポートもあります」

拓海が立ち上がり、テレビのリモコンを私に渡してきた。

「つかめる。ちゃんと本物だ」

拓海には触れられない、拓海が渡してきたものには触れられる。

「魔法みたい」

そうつぶやく私に声が応える。

「××××××は現在の地球よりも科学が発展しています。例えば、立体映像の投影は地球上ではホログラムなどという言葉で表現されていますが、それとこの××××××は少し違うシステムを使っています。これは現在の地球上では不可能な技術です」

なるほど、これが文明の違いっていうやつか。

「私達はこの××××××を新しい生活様式の提言として地球にこのシステムを売ってもいいと考えています。これが地球上での困難を乗り越えるためにあるべきだからです」

感情のないその声に説得されても、ピンとこなかった。

「あなたの星の人たちは、みんなこうやって一人で生活しているのですか？」
そう尋ねたのは拓海だった。
「はい。基本的にはこのような生活様式で暮らしています。このようにすることによって、あらゆる感染症から肉体を守ることが出来ます」
「それって、寂しくないですか？」
口からほろりと溢れた。一度溢れたら止まらなくて、すうっと流れ始めた。
「私は、そういうのはなんだか寂しいなって思います。だって、隣にいるはずなのに体温も匂いも感じられなくて、悲しんでいるときに手をにぎることすら出来ない。そんなの、寂しすぎますよ。大切な人の存在は声と姿だけじゃないって、私は思うんです」
「俺も、同じように思います」
そう言って拓海の重ならない手が私の手と重なるように同じ位置に置かれる。
「彼女の涙を拭うことが出来ない同棲なんて、嫌じゃないですか」
そういって拓海は私の顔を覗き込んだ。
「実験には参加しません。俺は今、凛花に会いたいんです」

気がついたら家の近くにある公園のベンチに座っていた。
「凛花、起きた？」
空気の振動とともに拓海の声がした。私の左肩にもたれかかり、手をギュッと握っている拓海のことがいつもよりも愛おしく感じられた。

「うん。ねえ、拓海」
「なあに？」
指と指をしっかり絡めて温もりを逃さないように握りしめる。
「私はこうやって隣にいるほうがいいな」
「俺もだよ。ずっと、ずっと、こうやって隣にいたい」

オンライン・サンタ

初芽

定年退職後、嘱託でさらに三年同じ職場に勤務し、「もう十分だ」と引退を促され、隠居生活も早六年。趣味はなし、特に夢もなし。

起きる、朝食、昼食、夕食、寝る。その間に新聞を読んだり、テレビを見たり。毎日毎日そんな味気ない生活を続けてきた。これからも続くのだろう。仕事をもたない自分は、なんとつまらない男だったか、と今年六十九歳になった平田芳雄は考える。

妻の君枝が昼食の準備をしている間、する事もなくてテレビをつける。

『今年もあと一か月となりました。皆さんは今年、どんな一年でしたか……』

ごてごてと飾られたセットを背にしたアナウンサーがそう言うと、街頭インタビューの映像に切り替わる。

『今年結婚しました。一人暮らしだったので、誰か隣にいる、っていうのが嬉しいかな』

『孫が小学校にあがってね。ランドセルを贈ったんだ。入学式の時は涙が出てきたよ』

『新社会人です。覚えることがいっぱいで、忙しい一年でした』

画面に映る人々は、笑顔で。充実しているように見えて。

テレビを消す。

君枝が

「消しちゃったの？　見ていて良かったのに」

と言うのにどう返そうか考えて
「あ、そうだ。焼きそばね、ニンジンが無いのにさっき気が付いたの。芳雄さん、ニンジン無しでもいい？」
と言葉を重ねられて、
「ああ、いいよ」
とだけ返した。

ニンジンの不在で茶色具合の増した焼きそばを食べ終え、昼寝でもするか、いや、今日は新聞を読んでいなかったか、と考えていると、ピンポン、とチャイムが鳴った。
皿を片付けていた君枝が「はいはい」と玄関に駆けていく。
ガラガラと引き戸を開ける音がして、「ばあちゃん、こんにちはー」という声。
「じいちゃん、元気ー？」
とリビングに入ってきたのは、孫の慶太だ。今年、大学二年生。「二十歳になったから、じいちゃんとビール飲む！」と誕生日を祖父母宅で過ごし、慶太の生まれ年に作られたワインを準備して待っていた父親をガックリさせた、じいちゃん子である。
自転車で十分の距離に住む慶太は、週に一回程度、芳雄と君枝を訪ねる。
平日の学校帰りにふらっと寄り、しゃべるだけしゃべって帰っていく日もあれば、「今日は飲む！」と芳雄をスーパーに連れ出してあれこれと買い込み（支払いは芳雄だ）、着替えを持ってきたからと翌日の昼間までダラダラと居座る日もある。
連絡もせずに突然来る、あれもこれもとねだる、挙句泊まっていく日は昼までリビングを大の字で占拠する。呆れたり困ったりしても、仕方ないなと許してしまうのだから、結局孫に甘いのだ、と芳雄は自分にも呆れている。

「今日はどうした」
放っておくと扉の前で何時間でも話し続ける慶太のために、早々に用件を尋ねる。
「あ、今日はね、これこれ、これを見せようと思って」
かばんから出てきたのは、一枚の紙。机の上に置かれたそれには、
『サンタさん急募！』
と書いてある。芳雄が何か言う前に、慶太は説明を始めた。
「近くに幼稚園あるでしょ？　俺、ここ来る時に幼稚園の前を通るんだけど、先生と仲良くなってさー。で、今日通ったら話しかけられて。なんか今年、クリスマス会のサンタ役が見つからないんだって。だからさ、じいちゃん、サンタやらない？」
「へー、幼稚園のサンタさん。いいじゃない、芳雄さん、やってみたら？」
君枝が先に反応したことで、慶太は外堀を埋めにかかった。
「ね、いいよね、幼稚園のサンタさん。あ、ばあちゃん、裁縫得意だよね。サンタの服作れたりする？」
「お手本になるものがあれば、作れると思うわ。作っていいの？」
「もちろん！　ばあちゃんが作った服なら、じいちゃんのやる気百倍でしょー」
勝手に話が進んでいく。
「おい、俺はやるなんて……」
「あ、でもね、そのサンタ、オンライン参加なんだよねー」
不本意なとんとん拍子、だったサンタ計画が、ピタ、と止まった。

ウキウキと裁縫道具を取りに行った君枝が、聞きなれない言葉に戻ってくる。
「慶ちゃん、オンライン参加？　って、どういうこと？」
「今さ、仕事も、学校の授業も、オンラインが主流でしょ？　だから、幼稚園でも、そういうの取り入れていこう、って話になったんだって。パソコンとかスマホとか、インターネットにつないで話すの。テレビ電話みたいな感じ？」
ようするに。サンタの格好で幼稚園を訪れ、子どもたちと触れ合う、ということではないらしい。人前で話したり、扮装をしておどけたりするような性格ではない芳雄からすると、少し敷居が下がったように思える。だが。
「慶太。その、オンライン、っていうのは、難しいんじゃないのか。サンタが見つからない、というのも、他の年寄りがパソコンだのスマホだのを触らないから、断られたんだろう」
芳雄も君枝も携帯は持っているが、スマホではない。パソコンもない。同年代の同僚の中には一人か二人「息子に持たされた」「孫に教わる」と言ってスマホを持っている者がいたが、この近所でスマホを使いこなす年寄りはいないだろう。
もっとも、近所に携帯を見せ合うような友人はいない。芳雄と違って社交的な君枝が、周りの奥さん方から聞いた話から推測した結果だ。
「じいちゃん、さすが。そう、先生たち、この辺の人にチラシ配ってお願いしたらしいんだけど、みんなダメだったみたい。そんな難しくないんだけどなー」
そりゃあ、暇さえあればスマホの小さな画面を見ているお前のような若者には、造作もないだろうが、と心の中でぼやく。新しい機能が、このアプリが、と興奮気味に話す慶太の話は、芳雄や君枝にはピンとこない。「タップして」「スクショが」と、いちいち横文字が飛び出すのも、話についていけない要因の一つだ。馴染みがなさ過ぎて、教わっても、その日の夜には記憶からこぼれてしまう気がする。

「面白そうだと思ったけど、私たちにも難しそうねえ……」
さっきまでやる気に満ちていた君枝も、しり込みし始めた。
君枝を完全に味方につけたと思っていたらしい慶太は、慌ててフォローする。
「そんなことないよ、全然難しくないって！　やってみたら案外簡単だよ？　ね、やってみようよ、パソコンなら俺のやつ貸すからさー」
誘う、というよりお願い、の体になり始めた。
「操作も教えるからさー……」
語気はどんどん弱くなっていくのに、諦めようとはしていない。諦めが悪い、良く言えば粘り強いのは慶太の特徴で、それは長所だ、武器になると言ったのは、他でもない自分だ、と芳雄はため息をつく。
「……慶太、パソコンを借りても、操作を教わっても、俺たちには覚えられん。お前が機械の準備を全部やる、というなら、サンタをやってもいいが」
慶太がくるりと芳雄の方を向く。
結局また、わがままを聞き入れた形になる。すぐに「わかった！」と了承すると思ったが、そうはならなかった。
「全部……？　つまり、じいちゃんは機械、一回も触んない、ってこと？」
「そうだ」
慶太が腕を組んで「んー……」と悩む。何かぶつぶつと言いながら、眉間にしわを寄せて、しまいには頭を抱えてしゃがみ込む。
そんなに嫌ならやらなくていい、ただし俺もやらん、と、口に出そうとした所で
「わかった。機械、全部俺がやる。任せて」
と立ち上がった慶太が言った。

オロオロと様子を見ていた君枝も
「慶ちゃん、お願いね。おばあちゃん、衣装頑張るわ」
と安心したように言う。
「うん、ばあちゃん、衣装よろしくね。じいちゃん、サンタ頑張ろうね！」
さっきまでウンウン悩んでいたくせに、嬉しそうな顔で慶太が言う。
慶太がやる気なら、応えなければいけないな、と気持ちが切り替わるあたり、やはり芳雄は孫に甘い。

クリスマス会本番まで、準備開始の時点で一カ月を切っていた。
幼稚園に出向いてサンタ役を務める旨を伝え、段取りの打ち合わせをする。打ち合わせでも横文字の分からない単語が飛び交ったため、芳雄は早々に会話から離脱した。
機械の操作は慶太がするのだし、自分は大まかな流れだけ把握していればいいだろう、と早くもやや消極的になる。
「こんなギリギリにお願いして、申し訳ありません。本当に助かります。当日は、よろしくお願いいたします」
園長に何度も礼を言われ、幼稚園をあとにする。

家に帰ると、君枝がサンタ衣装の準備に取り掛かっていた。
「型紙から服を作るなんて、昔慶ちゃんに作って以来ね。何年振りかしら」
と言って、嬉しそうに作業を進めている。
そんなに凝らなくてもいいんだぞ、と言っても、聞いていない。
あんまり楽しそうで、邪魔をするのも良くない、とそれ以上言うのはやめておく。

「じいちゃん、本番の背景、どこにしようか？」
パソコンを持って家の中をウロウロしていた慶太が尋ねる。
「どこだっていいだろう」
「え、ダメだよ。サンタさんの家から生中継、って設定なんだから。雰囲気出さないと」
「サンタさんの家？　どんな家だ。暖炉か？　トナカイか？　どっちも無いぞ」
「それっぽく見せるんだよー。背景だけだから、本物じゃなくても大丈夫だし。あ、この壁は？　画鋲とか、テープとか、いけるかな？」
ただサンタになって話せば良い、と思っていたが、予想に反して準備することが多い。
一度やると決めた事をやめるつもりは無いが、先が思いやられる。

結局、リビングの壁をサンタの家らしく飾り付け、背景にすることになった。
慶太が訪ねてくることが増え、飾り付けの荷物でリビングがごちゃごちゃとしてくる。
「やべー、文化祭みたいで楽しい！」
が、最近の慶太の口癖だ。
飾り付けの作業を手伝うと、慶太の学校生活に自分がいるようで面白い。だが、老眼と腰痛持ちの芳雄には困難な作業が多い。最初の方こそ「あれも」「これも」と頼んできたが、一週間もしないうちに、芳雄の作業は十分の一ほどに減った。
しかし、自分の老いを嘆いている時間は無い。芳雄には「サンタとして振る舞う」練習がある。本番で話す内容は決まっているし、慶太が準備した台本通りにすればいいのは分かっている。つもりだが。
「違う、ちっともサンタじゃない。それじゃ、いつものじいちゃんだよ」

「何が違うんだ。お前の言う通り、ゆっくり歩いて画面に映ったじゃないか」
「ぎこちなさ過ぎ。古いロボットみたい。あと、もうちょっと笑ってみて？　今のままじゃ、サンタさん見て子どもたちが泣くかも」
こうも言いたい放題に言われては、やる気を無くすというものだ。

本番が一週間後に迫った日。
君枝の作る衣装が完成し、慶太が来る前に着てみることになった。
「綿でサンタの髭も作ったの。もじゃもじゃして、サンタみたいでしょ？」
サンタになる芳雄以上にはしゃいでいる。
衣装に袖を通して、髭をつけて、帽子をかぶると、確かにサンタらしく見える。
「あら、いいじゃない！　今日は、これで慶ちゃんをお迎えしたら？　喜んでくれるんじゃない？」
「……どうだろうな」
いつも以上に反応の悪い芳雄に、君枝が首をかしげる。
「あいつは、俺がどうやっても「違う」「サンタに見えない」と否定ばかりだからな。衣装を着た所で、変わらないんじゃないか」
真っ赤な衣装も、もじゃもじゃの髭も、芳雄には似合わず滑稽なだけ。昔から何もしていなくても「怒っている」と言われやすい顔で、誰にでも愛想よくする性格でもない。無愛想な物言いも昔から変わらない。画面越しでも、子どもを怖がらせてしまうかもしれない。
クリスマスに子どもたちを笑顔にするはずのサンタが、怖がらせてしまったら。
慶太の言う通り、「ちっともサンタじゃない」。

「俺には、やっぱり向かないんだ。こんな衣装を着て、人前に出て、にこにこして。練習しても無駄だ。ちっともサンタらしくならない」

どっかりと椅子に腰掛けて、飾り付けられた壁が目に入る。

「こんなにごてごて飾り付けて。終わったら全部捨てるんだろう。背景だと言っていたが、それならここまで凝る必要はないじゃないか。折り紙で十分だ。風船や発泡スチロールまで使うことはないだろう。ごみが増えるだけだ」

「そもそも、慶太はどうしてサンタなんか勧めてきたんだ。あの幼稚園は慶太が通っていた場所でもないだろう。先生と親しくなったからって、行事にまで首を突っ込む必要はないはずだ」

「サンタがオンラインというのもどうなんだ。幼稚園に来たサンタと子どもが触れ合う行事だったんだろう。時代だか流行りだか知らないが、全部オンラインにする必要があるのか」「俺も、君枝も、パソコンが使えないのは、慶太だって分かっていたはずだろう。使えないのを分かっていて、わざわざ頼みに来て……。いつまでもわがままなやつだ」

止まらなくなった文句を、君枝が止める。肩をつかまれ、普段にはない君枝の乱暴な行動に驚く。

静かになったリビングに響いたのは、慶太がいつでも入ってこられるように、と鍵を開けたままの、玄関の引き戸がガラガラと閉まる音だった。

その日も、次の日も、慶太は来なかった。

飾り付けは二日前から何も進んでいないし、サンタの衣装もあれから一度も袖を通していない。サンタの練習も、指導役の不在で出来ずにいる。

君枝がぽつりと

「静かねえ」

と言った時、固定電話が鳴った。息子夫婦や慶太の携帯番号は名前が表示されるように設定しているが、画面に表示されているのは番号だけだ。

冷蔵庫に貼ってある『詐欺に注意！』のポスターをちらりと見ながら、

「もしもし……」

と電話に出る。

「あ、平田様のお電話でお間違いないでしょうか。私、今度のクリスマス会でお世話になる幼稚園の……」

と相手が名乗る。

クリスマス会に向けて、最終確認の打ち合わせに来てもらえないか、という連絡だった。

これから来られないか、という無茶な要求だったが、あいにく暇な年寄りだ。断る理由は何も無い。

幼稚園に着いてから、慶太がいなければ段取りが分からないのでは、と気付いたが、もう遅かった。慶太に連絡をするにしても、何から話せばいいか分からない。この前の話をどこから聞いていたか分からないし、分かったとしても気まずい事に変わりは無い。そうやってまごつく間に約束の時間が過ぎてしまう。

諦めて幼稚園の玄関でチャイムを押すと、園長が出てきて職員室に通された。

「申し訳ありません。この前の打ち合わせで使った部屋は、他の先生が使っていて」

「かまいません」

資料を忘れてきた、と一旦園長が席を外すと、若い先生が話しかけてきた。

「平田さん、パソコンはもう買われました？」

「は？」

思ってもみない質問に、思い切り顔をしかめてしまったらしい。

声をかけた先生が一瞬ひるむ。
「あれ？　慶太くんと、パソコンを使って話せるように、って……。スマホだったかな？」
話が全く見えない。
「すまないが、何の話ですか」
「え？　本当に、何もお聞きになってないんですか。慶太くん、春から大学のキャンパスが変わって、引っ越さなくちゃいけないから、会えなくても話せるように、「じいちゃんにオンラインで話すアプリと、パソコン操作を覚えてもらう」って。クリスマス会の話をした時に、「練習になってちょうどいいから、じいちゃんにやってもらう」って、そう言って……」
それ以上は手で制して、戻って来た園長と打ち合わせをする。
段取りの中の分からない部分は説明を受けて、何とか打ち合わせを終えて帰宅する。

「慶太が引っ越すって、知ってたか」
帰るなりそう聞いた芳雄に、君枝は正直に返す。
「いいえ。引っ越すの？　どこに？」
「俺も詳しくは知らん。さっき、幼稚園で先生に聞いた」
声をかけてきた先生が、慶太と親しくしている先生なのだろう。
引っ越しという大事を、祖父より先に相談するほど親しい。
今聞いてきたことを、そのまま君枝に話す。一人では、どうも冷静に考えられない。

「直接、聞いてみたら良いと思うけど。慶ちゃんに」

最後まで話を聞いて、少し考え込んでから、君枝はそう言った。
「幼稚園の先生も、どこまで聞いているのか分からないし。考えていたって、先には進まないでしょう？」
それに、と君枝が言葉を続ける。
「クリスマス会の準備も途中でしょう。芳雄さんと私だけじゃ、終わらないわ。慶ちゃんに来てもらって、きちんと準備して、子どもたちに喜んでもらいましょ」
あの子が来ないと、静かで寂しいわ、と最後に文句のような言い方をして、携帯を差し出した。
「慶ちゃんの番号、登録してあるでしょう。ほら、早く」
急かされるまま、慶太の番号を呼び出して発信する。
プルル、という呼び出し音が二回、三回、と続き、切ろうかと考えた十回目のあと。
「もしもし……？」
いつもの元気は無く、か細い声で、慶太が答える。
「今日は来られるのか」
芳雄の声も、いつもより弱々しい。
「……行っても、いいの」
慶太のか細い声が続く。
さっきより、堂々と。出来るだけ、いつも通りの声で。
「ああ。お前が来ないと、準備が終わらん」
慶太はしばらく黙っていた。そして、ようやく、絞り出すように言った。
「今、大学にいて……用事が済んだら、行くから。一時間くらい、待ってて……」
わかった、と言って電話を切ると、椅子にどかっと座り込む。

孫と電話をするだけのはずが、緊張で声が上ずった。
「疲れた……」
と思わず漏らすと、君枝がお茶を淹れてくれた。
大きめの湯飲み一杯を飲み切る頃には、いくらか気分も落ち着いていた。

日が落ちて暗くなってきた頃。ピンポン、とチャイムが鳴る。
誰も出てこないのを不思議に思って、玄関の引き戸を開けた慶太の前には、真っ赤な衣装のサンタ。に扮した芳雄がいる。
「うわっ！　え、じ、じいちゃん？」
「メリークリスマス」
決して流暢ではない発音で、お決まりのセリフを言って、慶太を家の中に招き入れる。
「え、あ、プレゼントをくれる、とかじゃないんだ」
「二十歳を過ぎたら大人だ。プレゼントは子どものもんだ」
そのたしなめ方はいつもの芳雄で、一瞬見えたサンタの面影はどこかに行ってしまったが、
「なんだ、残念」
と言う慶太の顔は、いつもの笑顔だった。

「三年になったら、ゼミに入るんだ。そのゼミが、今のキャンパスとは別の場所にあって。家から通いきれないから、寮に入ることになって。そしたら、今みたいにじいちゃん家に来られないから……。じいちゃんや、ばあちゃんがパソコンとか使えたら、会えなくても話せるなって思って。先生からクリスマス会の話聞いて、この機会に教えたら、

使い方覚えられるかなーと思って」
しかし、慶太の思惑通りにはいかず、クリスマス会のパソコン操作は、慶太の担当になってしまった。
というのが、慶太の話だった。
遊びに来られないから、それならせめて顔を見て話せれば、という、じいちゃん子丸出しの、優しい理由を聞いて、怒れるはずがない。
「聞こえてる事が分からなかったとは言え、知らずに文句言って悪かったな」
「俺も、何も言わずに、けっこう無理やり進めちゃって……ごめんなさい」
そうして、話がひと段落した所で
「慶ちゃん、おばあちゃんが作った衣装、どう？」
静かに様子を見守っていた君枝が、慶太に話しかける。
「めっちゃいいよ！　めっちゃサンタっぽい。あとはじいちゃんが頑張るだけだなー」
にやにやと芳雄の方を見る慶太に、
「指導役にも、具体的な指導をお願いしたい所だな」
と返す。
「いやいや、けっこう具体的に言ってなかった？」
「否定されてばかりじゃ、サンタのやる気が無くなるぞ」
「ちょっと、今モチベーションの話はしてないでしょー」
「なんだ、そのモチ……って。年寄りに優しい言葉を使え」
言い合いになる二人を見て、君枝が
「にぎやかでいいわねえ」

と楽しそうにつぶやいた。

クリスマス会当日。

前日の夜になんとか飾り付けを終わらせ、芳雄のサンタも慶太から合格点を得て、本番を迎えた。

打ち合わせの段取りでは、先生が「友達を紹介する」と言って芳雄に（正確には慶太のパソコンに）発信し、サンタの衣装を着た芳雄が画面に登場、という流れになっている。

登場してからのやり取りも何度も練習したし、背景の飾りも慶太いわく「超サンタの家。雰囲気ばっちり出てる」のだから、大丈夫なはずだ、と気持ちを落ち着ける。

本番まであと五分。

衣装の最終確認も済ませた。

画面に入らない所には、慶太も控えてくれている。

大丈夫だ。

パソコンの画面に「受信中」という表示があらわれる。

マウスを操作して、「応答」をクリック。

「メリークリスマス！」

今までの人生で、一番の笑顔が出来た、と思う。

少なくとも、怖がって泣き出す子どもはいなかった。

年が明けて、年度が変わった、四月。

リビングのテーブルに置きっぱなしのスマホがブーブーと鳴る。
「もしもし、あ、慶ちゃん？　え？　テレビ電話？　ちょっと待ってね。おじいちゃんに代わるから。芳雄さーん？　慶ちゃんから電話！　テレビ電話！」
リビングに入ってきた芳雄が君枝からスマホを受け取ると、スッスッと画面を操作して、スマホスタンドに固定する。
「どうした。もう授業は終わったのか。何、パソコンが壊れた？　壊れたにも、色々あるだろう。どこが、どう壊れたんだ。……それは壊れたんじゃない、設定をいじったんだろう。画面を見せてみろ」
スマホに映る慶太のパソコンの画面と、自分のパソコンの画面を見比べて
「ああ、ほら、ここの設定だ。俺の設定と同じようにしてみろ。今、こっちの画面をカメラで映すから」
と指示を出す。
「どうだ、動いたか。そうだろう。壊れてなかっただろう。だが、慶太。これくらい、周りに教えてくれる友達はいないのか。何、誰も分からなかった？　そうか、それなら、しょうがないな」

去年のクリスマス会の後、平田家にはいくつかの変化があった。
一つ目は、芳雄と君枝の携帯がスマホに変わったこと。
二つ目は、パソコンが設置されたこと。
そして三つ目は、芳雄が、慶太よりもスマホやパソコンなど「デジタル」なものに詳しくなったことだ。
「慶太、次はいつ、こっちに帰るんだ。そうか、ゴールデンウイークか。電車のチケット？　そんなものはオンラインで買え。そんなに難しくない。やってみろ」

発行日：２０２０年　１１月
発行者：聖徳大学文芸研究同好会
表紙：天野蒼空